

# 一九一二年のポール・ヴァレリー

——写真版『カイエ』の断章を中心に

恒 川 邦 夫

ポール・ヴァレリーの一九一二年は著名な美術蒐集家アンリ・ルアールの死(一月二日)で幕を開けた。前年の十一月九日から書き出されている『カイエ』<sup>(1)</sup>のノートの中頃に「死を考慮すること、すなわちあらゆるものから一切の価値を奪う絶対的零の使用」(四・六三九)<sup>(2)</sup>とあるのは、その何がしかの反映であろうか。

ヴァレリー四十歳の冬である。一月一五日にはNRF社のガストン・ガリマールがヴァレリー家を訪ずれた。用件はふたつ、当時NRF社が企画していたマラルメの詩集刊行に関して、ヴァレリーにボニオ(マラルメの女婿)家との間をとりもって欲しいという依頼事と、ヴァレリー自身の旧作の詩と散文を一卷にとりまとめて本に

したいという申し出であった。アガート・ルアール・ヴァレリーの年譜によれば、後者の話はすでに前年の夏頃からジッドを介して、それとなく伝えられていたもので、ヴァレリーは妻のジャーニーにあて「ジッドが極めて漠然とした話だが、僕に旧作の詩を本にまとめて彼のところから出さないかと言っている」と書き送っている<sup>(3)</sup>。

ヴァレリーがガストン・ガリマールの申し出に対してどのような反応を示したのかは解らない。もし当時の何らかの心の動きを伝えるものがあるとすれば、今日われわれがCNR S刊行の写真版によって目にすることのできる『カイエ』の断章であるが、日付のない断章の連なりの中から正確になにかを特定することは不可能である。

しかし敢て、いささかの危険を冒して、ほぼ一九一一年の年末から翌一二年の初頭にかけ書かれたと思われる断章の中からいくつかを拾いだしてみると、そこにある種の心の動きが読みとれることも事実である。

「本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>の狂氣、自分の中にある或るものを感じることに適合することが不可能な或るもの——何がそれを抑えているのか——本物を追い出すために、狂氣の芝居を演じる。

——瞬間<sup>キョウカン</sup>と集合<sup>ゲルン</sup>との恐ろしい対立

人間は同時に時間の三つの形を含むものだ。精神の内死んでゐるもの、生きてゐるもの、新たなもの。死んでゐると同時に生きてゐるもの……

われわれの内にあるすぐれたもの、より良いものは常に未来の価値を持ったものである。もし、わたしの最良のものがわたしの過去にあるのだとしたら、わたしは、とるに足らぬ過去、あるいはそれ以下の過去しか持たぬ者より、もっと情けない存在だ。

いく度、わたしはお前を精神の内に葬ったことか！

いく度、わたしはお前を知性の力でつぶしたことか。

責苦

お前はわたしがすっかり意氣沮喪して、打ちひしがれてゐると思うのか？

いや、そうは思わない。わたしが身を引けばまた元氣をとり戻すだろうと思つてゐるよ。

——一体お前はわたしに何をのぞんでゐるのだ？ 氣狂い相手に、生きた屍<sup>しかばね</sup>相手に何をしようというのだ？

——死人相手にふだんしていることと同じことさ。

——ああ！ お前はいつも何も言わないで打ちかかる。それでいて、口を開けば、何を言つてゐるのかよく解らない。何をお前がのぞんでゐるのか——そもそもお前が何かをのぞんでゐるのかどうかも解らない。お前は何かのぞんでゐるのか、それとも責苦<sup>くく</sup>の車<sup>くるま</sup>にすぎないのか？ 何故、生命であり行為の産み手であるお前が、眠りと隠遁をすすめるのだ？ お前はすべて休むことのない始まりと驚異のかたまりだ、お前は光を高々とかかげる、しかし、踏みしだくお前の足、土を喰<sup>は</sup>むお前の根も眞実なのだ。

お前が目を開くとき、お前はわたしの目に見えないものを見る。しかし見えなくとも、わたしはそれを感じる。だから、わたしはお前の偉大さに代価を支払うのだ。」(四・六四〇)

「あらゆる作品はその作者との関係でみれば、いい物である。他方、思惟などというものも、そのままの形では、一つの混沌にすぎない。

完璧をめざす者は姿を変え、取捨選択し、読者、記念碑、動物などといった外的存在をモデルに自分を合せていく。

一方、忠実に自分に従う者、内なる自分にどこまでもつき従っていく者は——涯しなく——あらゆる誤りに身を委ねる。

だから、もしそこで靈感か衝動かというような選択にせまられるとすれば、彼は前者に戻るか、さもなければ、彼の選択自体一つの偶然——つねにもう少しよかれと願うところのあの偶然でしかないだろう。」(四・六四二)

「わたしが師と仰いだ人々と書物はわたしに善悪両面の作用を及ぼした。善悪というのは、しかし、呼び方の違いで、一つの事だ。彼らが施してくれた善とは、わた

しを拡大してくれたことだ。そして悪とは、わたしの力を拡散してしまったことである。」(四・六四二)

歴大な『カイエ』のノートの中には、こうした透徹を求めるあまり張りつめた精神の玻璃が軋み音を立てるような断片が少なくない。一切の文学的野心を捨て、人間精神の機能のメカニズムをできるだけ「簡潔で最大限に有力な」言葉で表現しようという目的を持って、暗中模索のうちに一八九四年から日々書き続けてきた『カイエ』も、一九一二年の初頭ですでに大小さまざまのノート五十五冊に達し、写真版の頁数で三千頁を越えていた。引用した断章から読みとれるある種の「狂気」の自覚と、自らの精神を仮想敵に見立てた苦しい自問自答、あくまで過去を拒否し、諸々の外的存在との妥協である「作品」の誘惑を斥けて、精神の現在に生きようとする姿勢は、すでに二十代の半ばから数えて十七、八年の歳月を閲して独自の道を歩んできたヴァレリーのぎりぎりの自己防衛の姿に他ならない。

五月三十一日にはジッドから例の本の件で手紙が来る。「サン・ヒラザール街七九番地のガストン・ガリマール

宅へ、それでは、忘れずに送ってくれ給え。旧詩篇と

十『テスト氏ト一夜』

十『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』

十あの頃の断片類、

要するに、今度の君の処女作品集に収録さるべきテキストのすべてということだ。<sup>(5)</sup>

ジッドの催促はこの後六月五日、七月一九日の二回に及んでいる。とくに七月一九日の手紙では、もし君がどうしても気乗りせず、「君の関心のありどころからすれば、こんな出版屋の話なんか相手にしていられない<sup>(6)</sup>」と思うんだったら、話はないことにしよう<sup>(6)</sup>と氣を使って書いている。それに対して、ヴァレリーは、矢継早に熱のこもった二通の手紙を書いて答えている。

第一信から（この手紙に日付はなく、ジッドの手で一九一二年の七月と記されているが、次の第二信の日付が七月二一日で、二通の手紙に先立つジッドの手紙が七月一九日付であるとするれば、書かれたのは七月一九日の夜か、あるいは二〇日であろう）。

「さて僕のことだが、例のひからびた押花の標本集の件、一応考えてみて、机の抽出しをひっかきまわしたり

してみるのだが、どうも氣がすすまない——いやそれだから救われるのだ、これが大いに乗り氣になって、昔を懐しむようなら、それこそ、神様、大問題だ！ これまでのところ、僕にはまだこの本のイメージが湧いてこない。形も内容もその必要についても何もみえてこないのだ。

（中略）

「……」結局どうみても自分のものとは思えない舞台に、本当に、上らなければならぬものか？ 『メルキュール』や『フフランジュ』<sup>(7)</sup>にのせた論文に目を通したり、かつて自分の書いたソネットを気乗りのしないまま読み返したり、手形を保証するように保証したりする必要があるのだろうか？ あれ以来、僕の領分はこのテーブル、これまでおよそ《芸術のため》などではないことで四苦八苦を演じてきたこの台所のテーブルではないのか？

自分がかつて書いたものを本にするということは、その昔それを犠牲にして始めたある試みの放棄と挫折を意味するのではないか？

しばしば頭の中で、こうした苦しみを一挙に解決するには、いっそ僕のノート類一切を一からげにして君にあ

づけ、姿をくらませてしまえば、再びひとりになれ、すべてから解放されるのだと思う。

いいかい（これは余談だが）自分が苦しんだことはその分有効に使うなどという連中がいますとすれば、それはまさにまだ十分苦しんだことのない連中だからだ。そして最後まで抵抗し続けた殉教者がいるとすれば、そうした殉教者たちのがんばりが証明するものは死刑執行人たちの想像力の貧困だということ。

ある人に音楽の才能があるように、ある人には苦しむ才能があるのだ。皆が耳にすることも、それで腹痛を起すのはほんの一握りの人間にすぎない。<sup>(8)</sup>

そして、ほとんど日をおかずに書かれた第二信から。

「例の本については確かに迷っているのだ。無関心と自尊心と、校正刷のことを考えるだけでウンザリといった気持と、生来ものごとが完うできない自分に対するこの持前の諦念と、そして最後に、分子解体<sup>(9)</sup>とが入り混った何とも始末におえない状態。

ある時から、僕は一年十萬日の割で生きようとし始めた。しかし、それはできない相談だった。そのうちにハルビュニアたちと拷問<sup>(10)</sup>がやってきたのだ。僕が存在する

のは、疲労困憊の一日が終ったあと、再び無茶苦茶に忙しい明日が始まるまでの間だ。

本にする話を僕がのっけから、断固拒絶しなかったのは、まさにこの明日<sup>(11)</sup>を考えたからだ。僕は明日にも大変な苦境に立たされることになるかもしれない。そこで、自分に言いかせているのだ、一冊の本でも出れば、きっと、少しはそうした急場の役に立つだろう、と。<sup>(12)</sup>

一九〇〇年二十九歳でジャーニー・ゴビヤールと結婚して以来、アヴァス通信社の創立者エドワール・ルベールの私設秘書として生計をたててきたヴァレリーにとって、妻と二人の子供をかかえた四十歳の明日は確かに明るくはなかった。一冊の本の出版は、その意味で、もしも何事が起った場合（それはひとつにすでに十年以上つかえている老実業家の死であろう）何かの役に立つものかも知れなかった。しかし、それとは別に、文字通り『カイエ』の探究者として半生を送ってきたヴァレリーの内部に、ある種の整理の意志が働き始めていたことも忘れてはなるまい。<sup>(13)</sup> 一九〇八年の夏に、ヴァレリーは妻に宛て、初めて、『カイエ』の断章を主題別に分類し、一卷の

書物を編むことを仄めかしている。<sup>(13)</sup>そして同年六月には旧友のアンドレ・ルベール（エドワール・ルベールの甥）に宛て、周知の、「秩序を持つとする喜劇」<sup>(14)</sup>について語っている。そして、そうした『カイエ』の断章の整理の試みが、初めて、『カイエ』のノートに具体的な痕跡を露わにするのが、一九一二年である。すなわち、この年の『カイエ』を構成する七冊のノートの最終頁には、一冊を除いて、いずれも主題別の分類標目とそれに対応する断章の頁数が、あたかも巻末の索引のごとく、書き込まれているのである。因みに、そこに掲げられた標目の主なものを挙げれば、「知的」「訓練」「自我」「文学」「政治」「視点」「神秘」「偶然」「形而上学」「三法則」「感覚」「感情」「自由」「エロス」「観察」「音楽」「人間・機械」「注意力」などである。何かが、もしそう言ってよければ、この孤独な思索家の内部に熟して来ていたのである。

本のもことで、結局ヴァレリーが提案したことは、詩だけを集めて、私費で、一種の豪華本を刊行し、大部分は非売品で親しい友人たちに配り、うち五十部か百部のごく少数を、ちょっと「手の出ないような」<sup>(15)</sup>値をつけて、

愛書家に頒布するというものであった。その際、出版元はNRFとし、売れた部数一部につきいくらかという口銭を支払う……そのうち出来たら、詩と散文から成る別の一巻を編もう、それには「ビエール・ルイスがいいタイトルを考えてくれた、『メランジュ』というのだが、どうだろう？」<sup>(16)</sup>

ジッド宛第二信が書かれた二日後（七月二三日）に、ガストン・ガリマールが訪れた時、ヴァレリーが提案したのはその『メランジュ』であった。しかし、その後十月になって、ヴァレリーの方から豪華本の話を持ち出される。『ジッド・ヴァレリー往復書簡集』にのこされている当時の三通ほどの手紙からみるかぎり、話はほぼ先に述べたヴァレリーの提案通りに落着いたように思われる。

『カイエ』には先に引用したジッド宛第二信の日付と同じ（「一九一二年七月二一日」という日付が意味あり気に記され、その下に「わたしは内面の世界の存在を疑う」と書かれていた）<sup>(17)</sup>

さらにその後の展開については周知の事実である。一巻の本を編むには「少なすぎる分量と、それにもまして

内容の乏しさを恥ずかしく思い、新たに三、四十行の詩句を書き加えることを考えた<sup>(18)</sup>」のが、いつしか四年間におよぶ営々たる詩作の時になり変り、そこから『若きバルク』が誕生し、今日一般に知られるフランス二大戦間の文壇の寵児ポール・ヴァレリーのすべてが始まるのである。

\*

一九一二年が、ヴァレリーにとって、長い沈黙期から華々しい作家時代への橋わたしをなす転換期の、言わば、幕開けの年となったことには、マラルメの復権ということも与って力があつたように思われる。

もつともヴァレリーとマラルメとの関係は複雑に屈折したものであつて、一方の復権が同時に他方の解放を意味するような単純なものではない。そもそも青春の門口でマラルメに出遇い、その詩の完璧に圧倒され、その人と為りを熱愛しながらも、その呪縛から逃れるために詩を棄て、独自に己れを築く道を選んだヴァレリーにとっては、マラルメは愛の対象であり得たと同時に、自分を心底脅かす存在として、抹殺すべき対象でもあつたので

ある。

年初のガリマールの訪問の用件の一つが、マラルメの詩集刊行にまつわるものであつたことはすでに書いた。その後、ジッド宛三月四日付の手紙では「まだガリマールをボニオ家につれて行っていない」と書かれている。本質的に孤独の詩人であり、その孤独をこそ至上の教えとして自ら引継いだ自負を持つヴァレリーにとって、マラルメが脚光を浴びることは、現われるべきものが世に現われることとして嘉<sup>よ</sup>する一方、いまその師をかつぎだす者たちに対する深い不信の念があると思われる。そうした思いが行間から吹き出てくるような、「人の真似をする術と衣鉢<sup>いは</sup>をつぐ術」と書き出された『カイエ』の断章。

「人の真似をする術と衣鉢をつぐ術。文学における觀念の大部分は考えの拙なさを丸出しにしている。模倣者、弟子、追隨者などといったものについての考え方もそうだ。

ともあれ、実際に行なわれているところをみれば、そうした考え方のおかしな所は自ずから明らかになる筈だ。

わたしは文学における他人の仕事の便乗者という奴には我慢がならない。それは明らかな瓢窃者よりもっとたちが悪い。便乗者という奴は盗んだものを腐らせる輩だ。ただ自分のものとして署名するだけにとどまらず、彼らはもとの形を変形し、変色してしまうのだ。

もとの星がシリウスと呼ばれようと、別の名で呼ばれようと、奴は奴でしかない。

便乗者はあらゆる動物の中で一番ずるい奴だ。そうした便乗者と、これは大いに尊重すべき衣鉢をつぐ者とは一線を画すべきものである。その違いは無限に深く、無限に微妙である。衣鉢をつぐ者には、自分が絶対的な感化を受け、放って置けばそれに自らが呑み込まれてしまう危険のある教えを、自分は決して模倣すまいという絶対的な、ほとんど残酷なまでに鞏固な意志がある。讃嘆の念がかえってその教えを遠ざけるのだ。しかしそれでもなお、あらゆる努力にも拘らず、つねに自分よりも速度のある師に追いつかれ、とりこまれてしまうとすれば、それはたえようもない苦痛なのである。

知的には、同じ方向に行こうと、反対方向に行こうと……衣鉢をつぐことに変りはない。」(四・六四五)

さらにこの断章からほど遠からぬところに見出されるもう一つの断章。

「それは氣狂いじみた経験だった——思考する二つの存在の結合。互いに相手を認め、理解し、ほとんどあらゆることを言い合う稀有な事態が予感させ、予告し、約束する驚くべき收穫。果して人はかつてそのような経験をしたことがあるだろうか？

まだ試みられていないことが、どれほどあることか？(たとえば)いまだ特定されない、拡散状態の力に呼びかけ、内面の精神の配置と配分の裸形の時をもって、精神作業におもむこうと考えるものは誰もいないのか。不毛性は、ひとえに、そうした些末事による主観の、あるいは主観による些末事の粗雑な直接攻撃に帰因するのだということがまだ解らないのか。それは自らの豊かな源泉に目をつぶり、跳躍せずに跳ぼうとし、まだ眠りからさめぬまま踊ろうとするに等しい。

——結局、そうした試みはなされずに終わった。二つの

存在は結合されなかった。ある者たちは自らの主張が危うくなるのを恐れた。また別のある者たちは、自らのむところの「独自」の未来のために危惧を覚えた。彼らはこの上なく独創的なものになり得たであろう試みの裡に、大してあてにもならぬ自らの独創性の失なわれることを思っていたのだ。わたしが作家というものの人間性について、大いなる疑念を抱くようになったのはそれからである。そして、栄誉を求める者たちの汚ならしさに氣付くようになったのである。作家とは各人各流に彼らの美を排泄する人種である。彼らほど臆病で、偶像崇拜的な人種はいない。

(中略)

見出すことができるか……できないか!……——親密な関係にある二人の人間の間にそうした極限(あるいはそこに至る法則)を見出すことができるか、できないか。二人は視線と言葉と互いの予測によって触れ合う。ある時は互いに相手の心を見抜き合い、またある時は、一方の発見したものが、まさしく、他方の探し求めているものに合致する。通常の愛ならば、そうした一致に至るのは、ただ感覚と感情と趣味においてでしかない。しか

し、世間が後生大事に考えるそうした「すべて」は何ほどの意味もないのだ。そうした一体感は、単純化されているだけ貪婪であるにすぎない。恋人たちは自分の手足をもぎりとり、自らを變形し、その存在の大部分を抹消することによってのみ、一体化するのである。

しかし、わたしがいま摸索している結合は、自らの自我の探究における結合であり、存在の輪郭ないしは形の追求、認識可能なるものの扉を開こうとする努力における結合である。そこでは、われわれ自身与り知らぬ何かと、何が二人の間を分け隔つものであるかということについて、双方が無知を共有するという肝要なる一事によって、結ばれているのである。」(四・六五三—六五四)

ヴァレリーがここに書き記しているのは「思考する二つの存在の愛による結合」というテーマである。われわれはそうしたテーマが、若き日の奇妙なエロスの挫折・抑圧とフルマン、ルイス、ジッドなどとの深い友情の交換を通して、早くからヴァレリーの内部に胚胎しているのを知っている。しかしいま、ここで、そのテーマの詳細を展開する余裕はない。ただ、冒頭の「それは氣狂い

じみた経験であった」という一文はわれわれに有名なチボーデ宛ての手紙の一節を想起させることを指摘しよう。「ある晩、談たまたまボーに及んで」、とヴァレリーは書いている。

「会話が次第に親密の度を加えていった時、その親密な会話が日頃の非の打ちどころのない主人をこよなき友、慈父のごとき友に変えたのです。それは、わたしにとって何という夜であったでしょう。次第に緊迫する会話のやりとりが対話者間の純粹なる無差別——そんなことは夢だとスコラ派なら言うでしょうが——個体化の原理そのものに触れてくる時、それは恰もフーガの迫奏を思わせる迫力でした。まるで、わたりあう敵同士が、いつしか互に相手の動きを予測するのに長けてくるという精神の不思議な働きを通して、ある閾が、通常の対話者に対しては言語がそれをのり越えることを許さない閾そのものが、ほとんどのり越えられてしまったかのように。」

ヴァレリーのいう「氣狂いじみた経験」がこのような夜の経験にあったことはほぼ間違いないところであろう。もともと晩年のマラルメをとり囲んでいたマラルメの若

き弟子たちにとって、マラルメの魅力は、比類のない完璧な詩を彫琢する詩人とは別に、自ら主催する「火曜会」における絶妙なる座談家マラルメであった。恐らくは実際にその讒咳に接した者にしか理解できない話術の魔力によって、彼は「火曜会」に集まってきた若い客人たちをとりこにしていたのである。そしてその座談の時が、この世に容れられぬ孤高の詩人の晩年におとずれた唯一の「栄光の時」であった。

「しかし」、とヴァレリーは同じチボーデ宛の手紙の方で書いている。

「何やら刻限を告げる鐘が鳴り渡ったのです。するとはっとして眼をさましたようにみえる人々がでてきました。何だ！ 俺はもう三十五だ、四十だ！ それなのに金もなければ名前もない。このままいれば俺は破滅だ。そうなければいつまでも世間に頭が上らず、自分はだめだと思いつづけなければならぬだろう！ かくして本能的な何ものかが彼らを——新聞に、演劇に、学界に、政界に、出版界に、大衆に、すなわちあらゆる種類の浮世の排泄場所へ駆り立てたのです。」

ヴァレリーがマラルメから何を学び、何を学ばなかったかという議論は一見豊饒にみえて不毛である。なぜなら、もしそこに真に深いなにかがあるのであれば、人が人に及ぼす影響とはすべてか無だからである。先に引用した『カイエ』の断章で、ヴァレリーが「模倣する人」と「衣鉢をつぐ人」を峻別するのはそれ故であろう。「衣鉢をつぐ人」とは自分が危険なまでに深甚な影響を受けた人物の教えを「けして模倣すまいというほとんど残酷なまでに鞏固な意志」を持った人に他ならない。それなら何を受け継ぐのかと言えば、それは無形のイデアである。ヴァレリーがマラルメから学び、その栄光の後半生をも含めて、生涯変らず抱きつづけたのは、マラルメの「火曜会」あるいは「談たまたまボーに及んだ」あの一夜を祖型とした、あらゆる制約から解放され、涯しなく展開する二つの精神の対話による交流と昇華のイデアなのである。その意味では『エウバリノス』から『固定観念』を経て『わがファウスト』に至る後年の傑作のことごとくが対話体で書かれていることも故なしとしないであろう。年があけて、一九一三年の二月頃に記されたと推定される『カイエ』の次のような断章は、事実そ

うした対話を書く試み<sup>プロジェクト</sup>がヴァレリーに早くからあったことを示していて、興味深い。

「再びわたしはあの半は思い出——半ば心に温めてきた構想というべき——自分と資質の酷似した同類者<sup>ヤングライフル</sup>との会話のことを考える。然るべき条件の整った一夕、可能性の限界までおしすすめられる会話。

(深さにおいて、まさにそうした会話の一つと考えられるいくつかの思い出。たとえばマラルメとボーについて語った時のこと。その他にもいくつか……)

それは愛憎の入り混った、仮借のない親密さ——互いに相手の意中が次第にみえてくるようになり、親愛なる敵の核心へより深く、そして相手よりも速く到達しようと躍起になる。そこには一騎打ち、二人だけで展開するデッドヒート、性交を思わせるものがある。

白熱したチェスの試合などがモデルになろう。ゲームの規則。——

人間存在の証し。——

そうした対話を書くことは、そこかしこの力ない文学よりずっと価値のある試み<sup>プロジェクト</sup>だろう。」(四・九〇八)

そして一九一二年の『カイエ』に点綴されるマラルメ断章から、マラルメの二つの肖像。そこにはマラルメに対するヴァレリーのアンビヴァレンツが微妙な影を落としている。

「<sup>(21)</sup>SM文学に対する素朴な直観。

作者と事物、事物と言葉、客観的な言葉と主観的な言葉の見分けがつかないこと、それらの混同

自然な混同。

この文学の大きな子供は、言葉の上だけで違っているにすぎない事物の間に<sup>コントラスト</sup>対比ないしは類似性を指摘したことで、最高点に達し、ある重要な真実を捕捉したと信じている。

言葉とその効果とを共に観察するのが、学問的直観であろう……そこから、隠喩、文飾、変形などが主要な役割を演じるようになるのだ。従って、素朴な直観からより高度な直観へ移る者も、また、ある空虚、砂漠を横切ることになる。テーマが欠落した時代、不毛性が定着するetc。若い頃の習慣と新らしい様式との間の——危機。」

(四・六八〇)

「SMやさしい弱々しい声で、とてつもない、重要な、偉大な、深遠な、驚くべきことを言う。

やさしい弱々しい声で。

雷鳴や砲声の意味

ロビン<sup>(22)</sup>のような声で

フルートのような繊細な細部で

わずかに微笑むだけで

ぱっと陽が斜す

そしてフランス語での一種の嘯き。

——言葉が聞き取れなかった者、少し離れたところから聞いていた者には、彼がつまらないことを言っているように思えただろう。

そう思いこんだ……耳にはそれは確かにつまらないことだった

——しかし、この<sup>コントラスト</sup>対比とこの音楽

ほとんど完全に滑らかなこの声、この嘯きの力

その視野の広さと発見

その機略と見抜かれた<sup>マヌーヴル</sup>深淵<sup>フビーム</sup>

そして世界を向うに追いやって泰然たるその微笑……

そして、最後に、わたしはあの煖炉の火が燃えるひめやかな絹ずれのごとき音を想う、ゆらめき、燃え立ち、燃え燃える火、そしてほとんど自分自身のために、わたしに向って語る(独語する)その人(四・六八四)<sup>(23)</sup>

ヴァレリーにとって、マラルメはつねに生きた問題であった。肯定するにせよ、否定するにせよ、マラルメを語ることは己れを語ることであり、己れを語ることは同時にいくばくかは己れの中のマラルメ問題に立ち戻ることであった。その意味でも、一九一二年はヴァレリーにとって意義深い年であった筈である。NRFによって、マラルメ詩集が刊行されたのは翌一九一三年初頭である<sup>(24)</sup>。そして、ほぼ時を同じくして、チボーデの『ステファンヌ・マラルメの詩』の初版が刊行される<sup>(25)</sup>。先に引用した手紙は、同書の刊行に際して、ヴァレリーがチボーデに書き送った二通の手紙の一通(第二信)である。ヴァレリーとチボーデの接触は同書の校正刷の段階からであり、恐らく一九一二年の下半期にさかのぼるであろう<sup>(26)</sup>。チボーデの著書によって、マラルメは初めて正當にその真価を問われることになり、合せてマラルメの若き弟子たち

にも歴史的な位置づけがなされることになった。ヴァレリーもまたそこに『テスト氏』の作者として、マラルメを最も深く理解し、その遺志を體現した弟子の一人として登場する<sup>(27)</sup>。旧作の詩を本にする話で、七月にジッドに手紙を書いた時、ヴァレリーは「マラルメと踵を接<sup>くみす</sup>して詩集を出すなんて、色々な意味で恐ろしい」と書いている。いずれにせよ、一九一二年はマラルメの影が再び大きなのかかってきた年であり、ヴァレリーに様々な内省を強いた年であった。その一方、詩集刊行の話をはじめとして、五月のサンリジョン・ベルスの訪問やチボーデの著書に描かれたヴァレリーの肖像は、すでにヴァレリーが一種の神話的存在として、世に現われ始めたことを示すものであった<sup>(28)</sup>。そうした外的状況と先にも触れたヴァレリーの内的成熟は、ともに、ヴァレリーを外界へ送り出すひそかな推進力になっていたように思われる。

あたかも内にためたそうしたエネルギーを、絶好の機会をとらえて、あますところなく放射するように、一九一三年三月初旬、ヴァレリーはチボーデに宛て目のさめるような鮮かな文体の手紙(第一信)を書く<sup>(29)</sup>。けだし、一九一二年の『カイエ』に綴られてきたマラルメ断章と

それにとまなう深い内省の軌跡とが結晶した書簡文の傑作である。

「……わたしはこの比類のない人物を熱愛しました。

そして同時にそこに、その首を刎ねれば全ローマの首が一挙にとぶ唯一の頭——<sup>(32)</sup>値もつけられぬほどの頭——をみていたのです。あなたには、矛盾した諸々の欲望のとりことなり、それらを適当にまぎらすことができず、力と厳密さを具持しているように思われるすべての観念（観念というより創造力<sup>フンクショナル</sup>）に知的に嫉妬し、あなたも他の人々が肉体を追い求めるように、心ではなく精神に、それもこの上なく多様な精神の働きに恋い焦れる二二歳の青年の心の中に、いかなる情熱が存在し得るものかお解りいただけるでしょう。……

要するに、我慢がならなかった、何よりもまず自身自身に対して我慢がならなかったのです。しかし、この天使たちだけが相手のひそかな格闘は、アルコールにも比すべき作用をひき起すのです——それも甚大なる障害をひき起すのです。

言葉をかえて言えば——わたしは一種本能的な力をも

って、問題を脇道へそらしてしまい、「詩」も分析も言語も現実態や可能態の使用も、一切のものを——精神の力というただ一つの素朴な観念に還元してしまつたのです。わたしは、半ば意識的に、この誤り、ある（*erre*）をなす（*faire*）によって置き換える誤りを犯したので——まるで人は自分を自分の力で作りだすことができるかのように——一体何によって？——詩人であること、否。要は詩人であり得ること、であると。——」  
(四・九一一)

(1) ポール・ヴァレリーの『カイエ』は一九五七年から六年にかけて、フランスのC.N.R.S. (国立科学研究センター) より写真版で二九巻がでてゐる。その後、ガリマール社のブレイヤード叢書から、ジュデイス・ロビンソン夫人の編纂になる抄録二巻本が一九七三年—七四年に出版されている。

なお本稿の『カイエ』の断章はすべて写真版をもとに読み起し、翻訳したものであるが、ブレイヤード版にも収録されている断章についてはその旨註記した。

(2) C.N.R.S. 版『カイエ』四巻六三九頁を表わす。以下、写真版『カイエ』への参照はこれにならう。

(3) ブレイヤード版『作品集 1』三五頁。

(4) 一・八九二、ブレイヤード版『カイエ』第一巻八七八

頁。

(5) 『ジッドロヴァレリー往復書簡』(ガリマール、一九五五、四二三頁。

(6) 同右、四二五頁。

(7) 『メルキュール』は月二回発行文芸雑誌『メルキュール・ド・フランス』誌。ヴァレリーは一九九七年から九九年にかけて同誌に「方法」と題して三篇の書評(カルロヴィッチ著『軍隊の訓練と教育』評(一九九七年一〇月)、ミシュル・ブレアル著『意味論』評(一九九八年一月)、H・G・ウエルズ著『タイムマシン』評(一九九九年五月))、およびユイスマンスの三部作(『彼方』、『途上』、『伽藍』)を評した『デュルタル』(一九九八年三月)を発表している。

『フアランジュ』はジャン・ロワイエールの創立した雑誌である(『往復書簡』四二六頁の脚註参照)が、ヴァレリーが何を発表したのか不詳。雑誌名は正式には『ラ・フアランジュ』*La Phalange* であるが、ヴァレリーは複数表記している。そこからロワイエールの雑誌名にひittaけた「諸々の文学結社」というヴァレリー一流の皮肉な表現ともとれる。そうとるとこの箇所の文意は『メルキュール』やその他諸々の文学結社の雑誌にのせた論文」となる。

(8) 『ジッドロヴァレリー往復書簡』四二六頁。

(9) 「分子解体」は原文では「*démolition moléculaire*」。

手紙は日曜日に書かれているが、週日の秘書の仕事の忙しさとそこからくる疲労のことを指すと考えられる。

(10) 「ハルビュイアたちと拷問」。ハルビュイアはギリシャ神話の暴風と死を象徴する怪物であることから、生まれてきた子供たちのことを押揃って言ったのではないか。また拷問は次第に雑事に忙殺されるようになってきた秘書の仕事を指すと考えられる。

(11) 『ジッドロヴァレリー往復書簡』四二七—四二八頁。  
(12) これに関連して興味深いのは、アガート・ルアール・ヴァレリーの年譜にも引用されている一九〇八年三月一日付ジッド宛の手紙の記述である。

「この葉書とこの前の葉書との間に、僕はこの上ない危機に見舞われた——丸一日間の——純粹に知的な危機だ。僕はすっかりまいってしまった。今度という今度はどうにも自分を抑えるのに大変な努力が必要だった。それでくたくたになってしまったのだ。考えてもみてくれ、自分が必死になって研究しているさなかに、自分の最も大切な、最も独創的で基本的な二つか三つのアイデアが——他人によってほぼ発見され——しかも広く利用されていることが解たら一体どんな気持ちになるか。問題はある主題がどうか、文学的なディテールに関わる問題ではない、まさに根本的な資本的問題なのだ。すべてをそうした資本に投入し、自分の存在も諸々の可能性も投げ打ってきた僕のような者にとって、自分が、言わば、自分の内部の、しかも最

も奥深いところで人に先をこされと感ずるほど——辛いことはないのだ。あまりにショックが大きかったので、僕は妻にまでそのことを話した。

そして今は、なんとか、その観念の敵と僕の不幸とを折り合せようと努力している……このことについては、もうこれ以上一言も言うまい。」

一体このように一九〇八年のヴァレリーを打ちのめしたのは誰か詳かにしない（前年の一九〇七年に『創造的進化』を発表したベルクソンであろうか？）。いずれにせよ、この衝激がヴァレリーの内部にある種の整理の意志を生み出す一つの要因になったことは想像に難くないだろう。

(13) プレイヤード版『作品集 1』三三頁。

(14) 『ある人々への手紙』（ガリマール、一九五二）八三—八四頁。なお手紙の全訳は筑摩書房刊邦訳ヴァレリー全集第二巻所収。

(15) 『ジッド・ヴァレリー 往復書簡』四二九頁、ジッド宛 一〇月一四日付。

(16) 同右、四二八頁。なおルイスが考えてくれた『メランジュ』というタイトルは、書簡集では複数形で *Mélanges* と記されている。この語は通常複数形で「雑纂」「論集」の意味で研究紀要などの標題に用いられる。一九四一年に、ヴァレリーが『メランジュ』という標題のもとに詩と散文からなる一卷を編んだときの題名は単数形の *Mélange* で、その巻頭に「混合それは精神 *Mélange c'est l'esprit*」と

題された二連の四行詩が置かれている。

(17) 四・七七七

(18) 『ある人々への手紙』一二三頁。なお邦訳は筑摩全集第六巻所収。

(19) 引用のチボーデ宛第二信（『ある人々への手紙』九九頁）に「彼の生涯の最後の四分の一に至る頃、一種えもいわれぬ栄光の時が訪れました」とある。

(20) この断章は写真版『カイエ』四巻九〇八頁に見出されるが、近いところに偶々記載されている二つの日付、「一九一三年一月二七日」および「一九一三年三月一日」から、ほぼ一九一三年二月の後半ないしは三月初めに書かれたものと推定される。

(21) [Stéphane] Mallarmé]

(22) ヨーロッパ産ごまどり (Erichacus rubecula)

(23) 一九一二年の『カイエ』に記されたマラルメ断章としては他に次のようなものがある。

「マラルメの芸術は、さまざまな研究や分業が文学からかつての主題を奪ってしまった時、文学が向う限界である。

……かくして、純粹状態における言語芸術、自己目的的な言葉の組合せ・表層的詩学が出現するのだ——言葉に

よって捕捉される対象は詩学を存在させるためにのみあるのであって、その逆ではもはやない。」（四・七八二およびプレイヤード版『カイエ』第二巻一〇六五—一〇六六頁）

「R [ランボー] は M [マラルメ] より意味が一つ多い。」

しかしMはRより組織されている。

一方にはより多くの色彩があり、もう一方にはより多くの組合せがある。

——どちらがより豊かか？ 彼らは互いに対極に位置している」(四・八一七およびブレイヤード版『カイエ』一〇六六頁)

(24) ステファンヌ・マラルメ『詩集』は一九一三年の『メルキュール・ド・フランス』誌二月一六日号の新刊案内に出ているところから、一九一三年早々に出版されたと考えられる。

(25) アルベール・チボーデの『ステファンヌ・マラルメの詩』の初版は一般に一九一二年とされている。しかし筆者がマラルメ研究家で一九一二年の同書の初版本をお持ちの松室三郎氏にお訊ねしたところ、本の背表紙には確かに一九一二年とあるが、それ以外表紙裏、巻末などにも一切出版年月日を示す記述はないとのこと。一方、当時の雑誌の新刊案内を調べてみると、季刊雑誌である『RHLF』(『フランス文学史』誌)の一九一三年第二号の新刊案内に同著の名前がみえる。また出版元のNRFの雑誌『NRF』一九一三年二月号に、同著がマラルメの『詩集』と共に書評の対象になっている(執筆者アンリ・ゲオン)。以上のことからチボーデの著書は背表紙に一九一二年と書かれていても、書店にならべられたのは年が明けてからではないかと推定される。

(26) これはあくまで決め手のない推定である。「校正刷の段階から」のつきあいであるというのは、チボーデ宛二通の手紙を最初に公けにした『フォンテーヌ』誌(一九四五年夏)の編集者註にも書かれていることであるが、第一信の中で、かつて『王子イジチュール』という原稿をマラルメのところで見にしたことがあり、そこに『骰子一擲』と題された一章があったことを述べたあとで、「このことをもつと早くお役に立つ時にお知らせできなかったのは、その原稿をもう一度目にする機会を得たのがほんの数日前のことだったからです」(傍点筆者)と書かれていることから推測できる。

次にその時期が「一九一二年の下半期にさかのぼる」という推定は、一つに本の出版(一九一二年の年末ないしは一九一三年の初頭)から逆算した見当であるが、第一信の中に「あなたに是非忘れずに呈しておきたい大いなる讃辞は、あなたの著書には読者をして考えさせる力があるという点です」と書かれていて、それとほぼ同じ意味の断章が一九一二年の七月下旬から八月一杯までに書かれたと思われる『カイエ』のノートに記されていることも材料になっている。

「まやかしのない——著作の目的は単純明快である、すなわち考えさせるということだ。読者をして、思わず、考えさせること。内的反応を挑発すること。それこそ書物の王道(but napoléonique)である。そこから導き出され

る結論の第一は、すでに考えられたことの一切を排除し、除去することである。」(四・七八九) いずれにせよ、ブレイヤード版『作品集 1』のアガート・ルアル・ヴァレリーの年譜にある一九一一年二月の項の記述(その二月にチボーデに宛て手紙が書かれたとされる)は間違いないであろう。

(27) 特に同書(ここでは一九二六年の改訂再版の頁数)の四五〇―四五二頁参照。

(28) 『ジッドロヴァレリー往復書簡』四二六頁。

(29) ブレイヤード版『作品集 1』三六頁の年譜の記述による。「わたしはこれまで一番会いたかった人物は、エドガー・ポーとあなたでした……」というアレクシス・サンレジエ・レジエ(後のサンレジヨン・ペルス)の言葉が伝えられている。

(30) たとえば数年後(一九一四年)のアンドレ・ブルトンとの出会いが象徴的であろう。すなわち『テスト氏との一夜』が書かれた年(一八九六年)に生まれた若い、次代をになう青年たちがひそかに、しかし熱烈にヴァレリーを読んでいたのである。恐らく、まさにその存在の神話性ゆえに一層熱烈に……。

(31) この手紙はこれまで一九一二年に書かれたものとされてきた(但し、アガート・ルアル・ヴァレリーの年譜では一九一一年(註(26)参照)になっている)。しかし、写真版『カイエ』の四巻九一頁にここに引用訳出した部

分が「チボーデ宛の手紙(一九一三年三月一日)」という日付入りで転写されているのである(ブレイヤード版『カイエ』抄録二巻本の編者ジュディス・ロビンソンはその事を第一巻一四三頁の註で指摘している)。

写真版を見ると、筆跡が整い、書き直しなどの筆の乱れもないことから、まずは手紙を書いたあとで重要と思われる部分を自らノートに転写したものと考えて間違いないであろう。一方、このチボーデ宛第一信の内容から、手紙が書かれたのは明らかに『ステファンヌ・マラルメの詩』が刊行され、その本がヴァレリーの元に送られたあとであることが解ることから、一九一三年三月上旬の日付はほぼ妥当と考えられる(チボーデの著書の刊行時期については註(25)参照)。一つだけ疑念が残るのは、この第一信は手紙の書きだしに、「はつきりと、「この日曜日はいつもより少し自分の時間があります」とあって、手紙の書かれたのが日曜日であることが記されているのであるが、一九一三年三月一日は月曜日であって日曜日ではない点である。日曜日に書いた手紙を月曜日に一部転写して投函したということであろうか(そのため日付は月曜の日付になっている)?

なお以下に引用した部分は写真版『カイエ』に転写された手筆原稿を原本とした翻訳である。

またチボーデ宛手紙二通は筑摩書房刊邦訳ヴァレリー全集第七巻に松室三郎氏による名訳と懇切丁寧な註記とがあ

り、本論に引用した手紙の翻訳に際しては参考にさせていた  
いただいたことを明記し、合せて氏に感謝の意を表したい。

(32) 「その首を刎ねれば全ローマの首が一挙にとぶ頭」と  
はローマ皇帝カイウス・カエサル・ゲルマニクス(存位紀  
元三七―四一年、若き日を軍隊で過し、軍靴をはいていた  
ことからカリクラという異名を持つ)が、晩年狂気に見舞  
われ、残酷な情念の囚となり、自分に逆らう市民の首をい  
ちいち刎ねていたのでは増があかぬと思い、「その首を刎  
ねれば全ローマの民の首が一挙にとぶような頭」を夢想し  
たという故事に基く表現。一方、これはマラルメがバリの  
ローマ街に住んでいたことから、暗に、マラルメの周囲に

集まってくる連中など誰一人恐ろしくはない、マラルメさ  
え倒せばあとは問題にならないというアイロニーをきかせ  
た表現とも解釈できよう。

また写真版『カイエ』の四卷六九二頁(一九一二年第一  
四半期のノート)には「わたしは世界(人類)の首を一挙  
に刎ねるために、この世界(人類)がただ一つの頭を持つ  
ことを夢想した男の気持がよく解る」と書かれた断章が存  
在する。

(33) ( ) 内の文句はこれまで校訂されているテキストの  
いずれにもない部分である。

(一橋大学助教授)